

ヴィシュヌ信仰とガルーダ旗

山本悦夫

(1) クタブ・ミナルの鉄柱

デリーの南 15 キロの郊外 Mehrauli にクタブ・ミナル (Qutab Minar Complex) がある。クタブ・ミナルと人々に呼ばれるのは、空に聳える 73 メートルのこのミナル (ミナレット - 光塔) が一際目を引くからであろう。クタブ・ミナルは、ここにあるモスクの一部である。このモスクはデリー・ヒンズー王朝が崩壊した直後の 1193 年にヒンズー寺院が取り払われて、その基層の上に光塔 (クタブ・ミナル) と一緒に建設が始められたインドで最も古い (イスラム支配初期の) イスラム寺院である。モスクに

入ると、破壊されたヒンズー寺院の部材が再利用されているのを見ることができる。



(クタブ・ミナルと鉄柱)

しかし、ここで取上げようとしているのは、この巨大なイスラムのミナレット (クタブ・ミナル) ではなく、ミナレットと比べると、全長約 7 メートル、ほんの 10 分の 1 しかないモスクのコート・ヤードに立つ鉄製の柱である。この鉄柱はモスクが建てられる遙か以前に建てられた。しかし、インドの建築史上、鉄柱が残っている、というのは非常に珍しく、他には 11 世紀に Dhar に建てられたものがあるくらいのものである。

千数百年の風雨に耐え錆びもせず立っている鉄柱に奇跡を感じてデリーの人々はこの塔が願い事を叶えてくれるものと信じている。これが、クタブ・ミナルの鉄柱すなわちチャンドラ・グプタ 2 世 (Chandra Gupta II) の鉄柱である。クタブ・ミナルの鉄柱は、Ananthraman(1966)、M.C.Joshi(1975) などによってチャンドラ・グプタ 2 世(376-415AD)の統治下に造

られたことが明らかになった。鉄柱の碑文はチャンドラ・グプタ 2 世の死後、クマール・グプタ 1 世(Kumar Gupta I) (412-415AD) の初期に印されたものである。

このチャンドラ・グプタ 2 世の鉄柱 (以後クタブ・ミナル鉄柱と呼ぶ) の柱頭は、7つの部分から成り立っている。すなわち、下から順に、後方に傾いたベル、巨大で堂々とした膨らみ、薄い円盤、3枚の鋸歯縁の円盤、もう一枚の薄い円盤、それと方形のブロックである。

クタブ・ミナル鉄柱の柱頭部分は、クマール・グプタ 1 世 (Kumar Gupta I) 時代の Eran 石柱の先端に極似している。Eran 石柱の方形石は Chakra Purusha の台座の役を果たしている。Eran 石柱には、石彫りの Chakra Purusha、Chakra,人身のガル

一ダなどがその上に載っている。M.C.Joshi は、クタブ・ミナル鉄柱にも鉄または金属性の Chakra Purusha か Chakra, または人身のガルダが載っていたと示唆している。

柱頭のベル形部分については、William J.G.が「やや形は変わっているものの、アショカ王の石柱の修正されたプロト・コピーである」と述べている。

クタブ・ミナル鉄柱は、現在の碑文の位置の目線より高い位置に来る不自然さと碑文の内容から推し量ると、当初から Mehrauli に建てられたものではなくビハール州の Visnupada 寺院から移築されたものと考えられる。グプタ様式のブラミー文字の字体はアラハバド (Allahabad) のサムドラ・グプタ (Samudra Gupta) 石柱の碑文のものとよく似通っている。また最初の行の字体はビルサド (Bilsad) のクマール・グプタ 1 世の碑文と同一である。ブラミー文字のサイズは、アラハバドのサムドラ・グプタ (Samudra Gupta) 石塔の碑文のものと正確に一致する。



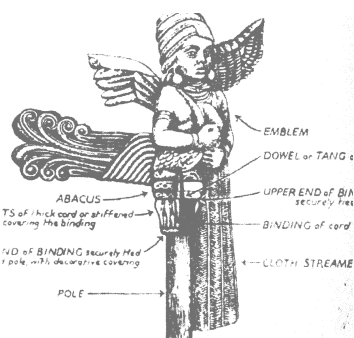
(鉄柱の柱頭)

Lal は、柱頭の最も上部は深い窪みのある方形の平面に造られていることからして、そこにはガルダ柱の旗竿、Chakra Purusha、Chakra、または動物像などをはめ込むために造られたのだという。

以上からクタブ・ミナルの鉄柱は、ヴィシュヌ神に捧げられた寺院の旗印であることが推論できる。

(2) Besngar の石柱

現存するガルダ柱頭の最古のものは、前 2 世紀の半ばのもので、1870 年中央インドの Besnagar において Alexander Cunningham によって Besnagar で発見された。



(ヘリオドロス石塔のガルダ)

Besnagar は、中央インドの Vidisha 地方にあり、デカン高原と西海岸の商業港湾とを結ぶ古代南インド交易ルートの理想的な地点に位置する。

石や金属製の柱頭の伝統は前 4 世紀に遡ることができるが、Vaishnava (ヴィシュヌ信仰) と Garuda Dhvaja (ガルダ旗) 信仰は、前 2 世紀ころに現れた。ガルダ柱頭がヴィシュヌ寺院に必ず建てられるようになったのも前 2 世紀であって、それからその伝統は中世へと続き、南インドでは現在でもヴィシュヌ寺院の入り口

には半人半鳥の坐像または立像のガルダ像が乗った柱頭が立っている。

(1) Besngar の 1 番目の石柱の柱頭のガルダ像は、今は失われているが、ブラミー文字と Prakrit 語で書かれた碑文には、この柱頭はヴィシュヌ神に捧げるためにタキシラの Antialcidas 王の派遣した大使ヘリオドロス (Heliodorus) によって建てられたとある。ガルダ柱は考古学者 H.D.Khare に率いられた Besnagar の遺跡発掘によって最初に建てられたのと同じ場所に残っていたことが確認された。石柱は、現

在の地表から 6.5 メートルの高さがある。これは、アショカ王の石柱のほぼ半分である。ピンクがかった褐色の砂岩で作られた石柱は、アショカ王の石柱ほど滑らかではないが、もともとはよく磨かれていたと考えられる。柱は縦溝があり、装飾にドリス式の特徴が表れている。Irvin に従えば、柱身は基部が八角形で中ほどまでは 16 面、そして次は 30 面、最後に丸い先端に形を変えている。八面と 16 面の柱の間は半円の帯飾り、16 面と 30 面の間は伝統的な果物を啜えた鳥が持ち上げた花輪で飾られている。3つ編みの綱のよう花輪には垂れ下がった葉が彫られてある。柱頭には綱がついたベルがついている。ところどころ破損しているものの、鷲鳥の足跡と花の蜜が流れる装飾が残っている。最近までこの石柱は、カンババ(Khambaba)として崇められていて、動物が犠牲として奉げられた。

(2) 同じく前 2 世紀の椰子の葉の彫刻がそこで発見された。これは、別の柱の柱頭の紋章であった。石柱も近くに横たわっていた。現在、椰子葉紋章の柱頭は土地の博物館に収蔵されている。



(生命の樹)

(3) 3 番目の柱頭は、マカラの装飾が施してある。これは、Cunningham によって発見された。これも前 2 世紀のものであるが、石柱の方は発見されていない。

(4) 4 番目の柱頭は、一番目の柱から 500 メートル先で発見された。柱頭の紋章は、Kalpadruma(生命の木)である。これは、コルカタのインド・美術館に納められている。

以上 4 つの柱頭の建立年月は、前 2 世紀後期に遡ることが出来る。ヘリオドロスはギリシャ人ではあったが、熱心なヴィシュヌ教の信者だった。D.R.Bhandarkar は、1913 年から 1915 年にかけてヘリオドロス石柱の付近を始めて発掘した。1963 年から 1965 年にかけては、M.D.Khare が僧院の近くを発掘した。そこで彼はヘリオドロス石柱と

同年代の寺院を発見した。

M.D.Khare によると、Besnagar の遺跡は次のように 3 層に分けられる。

第 1 層 (前 4 世紀後期—前 3 世紀前期) 楕円形寺院が発掘された。泥と木で造られているので崩れやすい。この寺院は前 200 年頃に崩れ去った。

第 2 層 (前 2 世紀前期) この時期までに煉瓦の壁に囲まれた土塁が崩れた楕円形寺院の上に築かれた。

第 3 層 (前 2 世紀後期) この頃、ヘリオドロスが現れる。彼は、この有名な碑文のついたガルダ石柱と他の 2 本の石柱を立てた。3 本の石柱の、碑文のついたガルダ石柱から南北の軸上に他の 2 本の柱が並んでいた。ガルダ石柱は、聖なるもので、もっとも重要なものだった。また Kalpadruma(生命の木)の柱頭が発見されたことから、この場所が聖樹信仰と関係があることも分かった。ヘリオドロスは、前 200 年の洪水で倒壊した円塔を片付けて、その跡にこのガルダ石柱を建てたのだ。

ヘリオドロスのガルダ柱は Garuda Dhvaja(ガルダ旗)として知られている。こ

これは、Garuda Dhvaja が碑文の記された石柱記念碑に取り付けられた初めての例として重要である。本来、Dhvajastambha は、旗印や動物の紋章がついた旗を掲げ持ち運びできる旗竿を意味した。古代インドでは、Dhvaja（旗）は、戦争や儀式の際に必ず掲げられた。リグヴェーダ（Rigveda）VIII.96.4 はインドラ神が携える旗を Indra Ketu、Indra Dhvaja と記している。



(バルフートの Garudadevaja)

Dhvaja の第一義的な重要性はその時代の宇宙観を顕わしていることである。Garuda Dhvajastambha(ガルダの旗竿)の形は、サンチ (Sanchi) の仏教記念碑にある前2世紀の柱に似通っている。前2世紀後半のバルフトでは馬の背に Garuda Dhvaja を捧げ持っている人物像が彫られてある。数ある Dhvaja(旗)の紋章の中でガルダは最も人気があったのだ。前2世紀後半以降、ガルダはヴィシュヌの乗り物としての役割を完璧にこなして来た。

ガルダは、ヴェーダの神話では Syena /Suparuna と呼ばれていて、与えられた場所は宇宙柱の先端だ。そして、ヴェーダの神話では宇宙柱の基部には蛇が絡んでいる。すなわちこの柱は宇宙の鳥と蛇との2元性を表現しているのである。

(3) グプタ・コイン

Garuda Dhvaja (ガルダ旗) は、グプタ朝 (319-578AD) (注) のコイン、印章、柱頭、美術などに溢れかえっている。というのは、グプタ朝の歴代の支配者はヴィシュヌ神とガルダの熱烈な信者であり、Garuda Dhvaja(ガルダ旗) がグプタ朝の国章だったからなのだ。



(チャンドラ・グプタの金貨)
—Lucknow museum—

グプタ朝で铸造された金貨には 33 種類の異なったタイプに分けられる。そのうち Garuda Dhvaja の金貨は、サムドラ・グプタ (Samudragupta) の治世からスカンダ・グプタ (Sukandagupta) の治世までの 120 年ほどの期間 (350AD - 467AD) に王錫、射手、剣士、Apratigha,王とラクシュミの 5 種類のタイプが铸造されている。

左の図を見ると、金貨の真ん中にすっきりと直立しているのが射手である。左端に Garuda Dhvaja (ガルダ旗) が見える。マハーバーラタ (Adiparvan, I, 23-30)によると、ガルダは、アム

リタ (不老不死の霊薬) を天界に取りに出かけた帰り道でヴィシュヌ神と闘うことになった。なかなか勝敗がつかないときに、ヴィシュヌ神が出した講和条件の一つとして、高々と掲げられる旗の座に収まることになったのだ。

また、古代インドで Dhvaja(旗)が戦争や儀式の際に使われたことがリグヴェーダに記されている。リグヴェーダの時代、Yupa と呼ばれる木または石の柱が祭祀に使われた。Yupa の前では動物が神に捧げるために犠牲にされ、Yupa に括り付けられた。Yupa は、宇宙樹と同意語でもあり、Garuda Dhvajastambha (ガルダの旗竿) の源となった。

大きく不動の円筒石柱の上にガルダの石像が乗せられるようになったのは前 2 世紀のことであったが、持ち運びの出来る Garuda Dhvajastambha (ガルダの旗竿) は、それ以前から使われていたのである。

(注) グプタ朝 (320-550AD) は、チャンドラ・グプタ 2 世 (位 376 年頃~415 年頃) のとき、北インドを統一し、全盛期を迎えた。サンスクリット文学は最盛期を迎え、ヒンズー教の二大叙事詩「マハーバーラタ」「ラーマーヤナ」、カーリダーサの戯曲「シャクンタラー」などが生まれる。またマヌ法典も完成した。仏教側から見てもナーランダ仏教僧院が設立され、アジャンター石窟寺院の仏教壁画や「グプタ仏」と呼ばれるサールナート派の仏像が多数作られた。しかしながら、この期を最後にインドでは仏教は衰退を始め、ヒンドゥー教に覆われた社会に転換していくのである。

参考文献

- Apantharaman, 1966, The Rustress Wonder, A Study of the Iron Pillar at Delhi, Delhi
- Joshi M. C. ed. 1989, King Chandra, & Mehrauli Iron Pillar, Meerut
- Lal, B. B. 1989 The Delhi Iron Pillar, in M. C. Joshi, ed King Chandra, & Mehrauli Iron Pillar, Meerut
- William, J. G. 1983 The Art of Gupta India, New Delhi
- Khare M. D. 1997 Discovery of Vishnu Temple near the Heliodorus Pillar
- Irvin J. 1978 Heliodrus Garuda at Besanagar
- Yamamoto, Etsuo & Sharma, D. P. 2008 Garuda in Asian Art, New Delhi